

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：14701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531154

研究課題名(和文) 教科「生物活用」における障害者との共同授業モデルの実証的研究

研究課題名(英文) Empirical Research on the joint class with the disabled person in the subject " Bioresource Utilization "

研究代表者

阿部 英之助 (ABE, Einosuke)

和歌山大学・教育学部・その他

研究者番号：10408982

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、農業高校での教科「生物活用」の学習方法である「交流活動」や「療法的手法」に着目し、そこでの授業実践や障害者との交流活動の在り方について調査を行った。そこで明らかとなったのは、今後は「生物活用」が目的とする「交流活動」や「療法的手法」を通して、そこでの学びが多様な生徒の進路保障へとつながっていくことが重要である。また、学校と福祉関係機関との地域連携や学校間連携をより取り入れることで、学校内で完結しない幅広い学びへと展開させる必要がある。すなわち、実践的な学びと新たな農業福祉教育の在り様を示していくことが今後の「生物活用」の方向性であるといえる。

研究成果の概要(英文)：I investigated class practice of "the creature utilization" and the interchange with the person with a disability and investigated the joint class with the disabled person in the subject " Bioresource Utilization "It became clear that it was necessary that the learning was tied to the course of the student to deepen a certain "interchange" and "therapy" for the purpose of " Bioresource Utilization " To that end, the cooperation with the school is important, and it is necessary to let you unfold to the wide learning out of the school.

研究分野：高校・職業教育

キーワード：農業高校 職業教育 専門教育 農業教育 生物活用

1. 研究開始当初の背景

本研究は、研究代表者が以前、採択された若手研究(B)「農業高校における農業を通じた障害者教育の展開と課題」(2010~2011年度)がベースとなっている。

(1) 農業高校の現状

農業高校は、現在学校統廃合や学科再編による空き教室の増加やこれまで特別支援学校との農業を通じた交流などの実績などから農業高校の敷地内に特別支援学校が併設される傾向が多くなってきている。

これまでも農業高校と「特別支援学校」との関わりも古くから行われ、農文協『農業教育』には、兵庫県立氷上高等学校の「小学校・養護学校と連携して新しい教育・農高づくり～生徒が教えるなかで学ぶ『課題研究』～」(47号,1993年)がとりあげられている。また、その連携内容は、「リンゴのもぎ取り」や「動物とのふれあい」などが行われてきているが、それらの教育的効果やその手法など体系的にまとめたものは、数少ないと言える。一方で特別支援学校は、教室不足や知的障害と判断される子どもが増える一方で施設設備が遅れている。2009年度の特別支援学校在学者は11万7035人で前年度より約4700人増えているが、学校数は全国1030校と4校しか増えていない。そして「特別支援学校」においても、「農業」を通じた教育実践が行われてきている。

奈良県立養護学校では、学内に圃場を設け障害の度合いに合わせた農作業を行い、さらには加工品作成そして、地域への販売実習などまで行っている。これらの取り組みは、「農業体験」の域を超え、「農業の分野の特性を活かした職域」を視野に入れた教育実践につながりうるものと考えられる。このような社会的背景と現状を踏まえつつ、「農業高校」における「農業」を通じた「障害者」教育的意義と課題を明らかにすることは今日的課題といえる。このことを示すように、山形県立村山農業高等学校では、平成20年度に「村山特別支援学校楯岡分校」が校内に併設された。村山農業高校と相乗りする教科として「環境福祉」が設定されるなど、「農業」分野における「福祉」的視点からのアプローチが始まりつつある。

その一方で、農業高校内においても発達障害を持った生徒が入学してくる傾向が多く、彼らへの理解やその学習対応に対して差し迫った課題にもなっている。

(2) 「生物活用」を通じた教育実践

このような視点に立って、特別支援学校が併設され「共生・共育」の理念の下で「共同授業」と「交流授業」が行われている事例と、

教科「生物活用」の展開として「園芸セラピー」の講座や初級園芸福祉士の資格取得など、療法的手法を取り入れている事例を中心に調査研究を行った。両者ともに農業高校の特性を活かした新たな学びを行っている事といえる。

この2つの農業高校を中心に、授業見学及び担当教員そして生徒への聞き取りなどの現地調査を行い、そこでの取り組み内容や課題などについて検討を行った。2校の取り組みは、農業高校では先端的な取り組みであるものの、多くの農業高校にまだ広がりが見えないことも明らかとなった。

しかし、全国各地で農業高校と「特別支援学校」との教育連携が進む中で、農業教育における「福祉」的視点からのアプローチが始まりつつあり、そこでの教育実践の方法や評価の問題などは、農業高校における今日的課題でもあるといえる。

(3) 農業高校の新たな学力形成の把握

農業高校では、これまで生産的・経済的価値そして環境的価値がその学習として取り上げられてきた。その一方で以前から農業教育は、人間形成に役立つ事が言われ、動植物を栽培飼育することで優しい心や根気強さ、責任感など人間形成に必要な力が育つことが指摘されている。

そのため、学習指導要領では新分野として「ヒューマンサービス領域」の科目が新設され、現在、多くの農業高校が、既にヒューマンサービス系の科目として「生物活用」と「グリーンライフ」が実施されているが、その教育内容は実態が掴めておらず、その授業展開が課題となっている。

本研究のねらいは、「生物活用」における「対人サービス実習」としての可能性を探る事にある。その背景には、この「生物活用」での学習を通して、生徒たちが学んだこと<知識・体験・技術>を誰にでもわかるようにユニバーサルなものにして他者に伝えることなどが、新たな農業高校の学力保障を示すものとして把握することも研究目的の1つである。

2. 研究の目的

このような状況を踏まえ、本研究では『学習指導要領・農業編』における「ヒューマンサービス領域」として設定されている教科「生物活用」を中心に上げて行く。この「生物活用」は、「グリーンライフ」共に設定されているが、その教育内容の実態やそこでの授業実践の内容についてはなかなか掴めておらず、その授業展開が課題となっている。

そこで本研究のねらいは、「生物活用」において授業実践されている事例から「生物活用」における教育的可能性やそこでの授業展

開の課題などを把握することが目的である。とりわけ、特別支援学校との「共同授業」と「交流授業」の授業実践の事例を中心として、「対人サービス実習」としての教育的可能性について検証することとした。

3. 研究の方法

研究方法としては、これまで研究代表者が継続的に訪問してきた2つの学校を中心にそこでの授業実践及び運営やカリキュラムなどの分析などを行った。

(1) 特別支援学併設における授業実践事例

事例1の農業高校は、同高の校舎内に特別支援学校の分校が併設され、「共生・共育」の取り組みが行われている。特別支援学校の生徒が農業高校の各学科の授業に参加し交流を深める「交流授業」と同高のコースの生徒が特別支援学校の生徒に農業を教える「共同授業」がカリキュラムとして組み込まれている。すなわち、イベント的な取り組みではなく、授業として継続的な関わりが行われているのが特徴である。

事例1がある県では「今後の特別支援教育の在り方について」(2005年)の報告を受け、障害のある児童生徒も障害のない児童生徒も、居住する地域社会の中で、共に生活し支え合い育つとともに、個々の教育的ニーズに応じた適切な教育を行うことを目指す「共生・共育」が取り組まれているのも特徴的である。「共生・共育」を推進する事業として、通常の学校への特別支援学校の分校設置に積極的に取り組んでおり、小・中・高校に分校が併設され、高校では、農業・工業・商業・水産高校に高等部の分校が併設されており、この取り組みが広がりつつあると言える。

(2) 療法的手法を取り入れた実践事例

高松農業高校では、「生物活用」の展開として「園芸セラピー」の講座と初級園芸福祉士の資格取得など療法的手法を取り入れ、農業高校の特性を活かした学びの展開を行っている。

以上の2校を中心に農業を核とした障害者教育の授業課題やそこで行われている「共同授業」と「交流授業」のその在り方などを検証していった。また、各農業高校で実施されている「生物活用」の教育内容分析を行い、その実態を明らかにしするとともに、農業高校における特別支援教育に対する現状なども把握することを試みた。

前者の農業高校では、学内に分校専用の圃場を設け障害の度合いに合わせた農作業を行い、さらには加工品作成そして、地域への

販売実習などまで行っている。これらの取り組みは、「農業体験」の域を超え、「農業の分野の特性を活かした職域」を視野に入れた教育実践につながりうるものと考えられる。このことを示すかのように、平成14年度「障害者基本計画」における後期5年間の「重点施策実施5カ年計画」(平成19年度～平成24年度)においては、「農業法人等への障害者雇用の推進」が明記されている。このような社会的背景と現状を踏まえつつ、「農業高校」における「農業」を通じた「障害者」教育的意義と課題を再確認することが出来た。

4. 研究成果

本研究は、農業高校の教科「生物活用」において実施されている特別支援学校との「共同授業」と「交流授業」の分析から農業を通じた障害者教育の教育的効果について、明らかにすることである。

(1) 「共同授業」と「交流授業」の分析

特別支援学校が併設されている中で「共同授業」と「交流授業」の分析について見ていきたい。当初は、「共同授業」と「交流授業」の継続的な授業分析などを行っていたが、担当者の異動などもあり、経年的な把握での分析が十分に行えなかった。

しかし、この「共同授業」と「交流授業」では、園芸と福祉を融合した「ユニバーサル園芸」を活用したキャリア教育として行われている。その目的としては、「農業が持っている多面的な価値を認識させ、その魅力を生徒自身が自らの力で他者に伝えることができる」のポイントを踏まえて、生徒自身が理解し、わかりやすく他者に伝えることで、農業教育が今まで行ってきた農業技術教育(テクニカル・スキル)だけでなく、自ら物事を考える発想力や企画力(コンセプトスキル)そのための情報収集をする相互理解能力(コミュニケーションスキル)を対人サービス(交流活動)によって学ぶことが目的とされている。

農業高校で学んだこと<知識・体験・技術>が「共同授業」と「交流授業」を通して、誰にでもわかるユニバーサルなものにして他者に伝えることが、すなわち、従来教師から生徒へ伝えられる教師主体による「知識・理解」に留まらず、さらには農業高校生が、特別支援学校の生徒に「技能・表現」を伝える事が、生徒自身に「伝える力」といった学びの成長保障といった新たな農業高校の学力保障を示すものに繋がる事が分かった。

また、これら取り組みにおいては、連携授業の運営上の綿密な打ち合わせや生徒の個々の障害などを理解した上での指導方法が必要であり、その手法などについては、ある程度の分析をすることができた。

その一方で、これらの取り組みが農業高

校・特別支援学校の生徒の進路意識にどのような影響を及ぼしたかといった視点からの調査は十分に分析することができなかった。個々の生徒の卒業後の進路だけを見ると、特別支援学校との「共同授業」との直接的な関わりを持った生徒は福祉・介護関連職への就職が多いなど少なからず生徒の進路において影響を及ぼしているといえよう。

(2) 農業高校における特別支援教育

「共同授業」と「交流授業」に関する分析はやや不十分であった。その一方で研究2年目からは、新たな調査対象校として関西圏にある農業高校の分校への聞き取り調査を実施した。この高校は、長年にわたり多様な生徒の受け入れてきており、昨今では発達・知的障害を持った生徒が多くなってきているという。そこでの授業運営上の課題や生活指導さらには進路・支援指導などの現状について担当教員への聞き取りと授業見学などを行った。

授業見学においては、とりわけ実習授業での留意点や機械などの作業上の注意点などを知ることができた。また個々の生徒たちの理解度の問題やそれにむけて授業対応の方法なども把握することができた。とりわけ進路・支援指導については、行政機関・福祉関連施設との連携やさらには地元地域企業と連携を密にすることの取り組みの必要性が差し迫った課題であることが分かった。

(3) 海外事例調査

また、ドイツ・ミュンヘンへの海外調査もあわせて行った。農が持つ多面的機能として、園芸福祉の実態やクラインガルテンやシュピタルなどの視察を行った。

1576年に設立されたユリウスシュピタル財団は、病院、老人介護施設、介護士養成職業学校などを経営しており、さらには運営金を得るために歴史的にもワイナリー経営を行うなど、農業と福祉との連携についての歴史的な素地を見ることができた。

海外事例視察を通して、農業の持つ福祉的機能などに対して理解を深めることができたと同時に、農の多面的機能が定着する都市環境の素地や福祉・環境的な視点立った街づくりの実態も併せて視察したことでより幅広い視点から捉えることの示唆を与えてくれた。

(4) 教員の研修機会の確保

また、今回の研究で明らかになったのは、農業高校教員への障害者理解やそのための授業実践の方法などについて教員研修の機会の保証とその必要性である。

その背景には、農業高校教員の採用が少ない中で、ベテラン教員の大量定年を迎える中

で、個々の若手教員のスキルアップや農業技術の向上にむけて取り組みが必要に迫られている問題がある。また、これらの教育的なスキルの向上のみならず、多様な生徒に対する理解やその対応などについても差し迫った課題でもあることが明らかとなった。

(5) 今後の課題

農業高校の視点からは、最初に担当教員及び生徒への障害者理解にむけた事前ガイダンスなど「交流事業」にむけて導入に向けた授業展開があげられる。次いで、生徒が学んだ農業技術などの知識・理解の「学び」<input>を実際に特別支援学校の生徒にどのように教えるといった「練習・思考」<exercise・thinking>そして、実施に「共同授業」での「伝達」<output>といった授業方法の構築とそこでの課題や教育的効果を明らかにしていく。また、授業法などにファシリテーション法やインタープリテーション法の活用やその為の教材作りなどを現場教員と共に、共同開発することが今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

阿部英之助、「農業教育における『共生・共育の可能性』」、『技術と教育』、査読なし、通巻 482 号、41-43 頁、2014 年

阿部英之助、「農業体験学習の深まりとその持続性」、和歌山大学教育実践総合センター紀要、査読なし、No.23、185-188 頁、2013 年

阿部英之助、「生物活用による特別支援学校との共同授業における課題とその可能性」、日本農業教育学会、査読なし、第 44 号別号、41-44 頁、2013 年

[学会発表](計 2 件)

阿部英之助、「生物活用による特別支援学校との共同授業における課題とその可能性」、日本農業教育学会、2013 年 9 月 1 日、秋田大学

阿部英之助、「農業体験の深まりと子どもの意識に及ぼす影響」、2012 年 9 月 2 日、愛知教育大学

[図書](計 2 件)

編者：日本産業教育学会、共著者：沼口博、寺田盛紀、森下一期、阿部英之助、佐々木英一、夏目達也、森下一期ほか40名、『産業・職業教育ハンドブック』、大学教育出版（岡山）全324頁、（分担）50-54頁、2013年

編者：佐々木英一、堀内辰雄、伊藤一雄、共著者：阿部英之助、佐藤史人ら他5名、『日本と世界の職業教育』法律文化社、全179頁中（分担）1頁、2013年

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

阿部 英之助 (ABE Einosuke)
和歌山大学・教育学部・特任准教授
研究者番号：10408982

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：